

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 5月 30日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21710256

研究課題名（和文） グローバル時代におけるアフリカ遊牧社会の生存戦略と発展の潜在力に関する研究

研究課題名（英文） A Study on the Dynamics of Livelihood Strategy and Potential for Future Development among Pastoral Societies in Africa

研究代表者

孫 暁剛（SUN XIAOGANG）

筑波大学・生命環境系・助教

研究者番号：20402753

研究成果の概要（和文）：本研究はフィールドワークと比較研究を通して、アフリカの乾燥・半乾燥地域に暮らす遊牧民が、地球規模な気候変動とともに自然災害（旱魃、集中豪雨など）の増加と、グローバル化や市場経済化とともに社会・経済環境の急速な変化に対処し、生存基盤を維持するメカニズムを明らかにした。遊牧社会の持続可能な発展のためには、不確実性に対応した在来の遊牧技術と戦略を生かしたうえで、近代科学技術と融合したリスク・マネジメントが望まれる。

研究成果の概要（英文）：This research studied the current livelihood and adaptive strategies of nomadic pastoralists in the arid and semi-arid area of Africa. Although pastoralists have experienced both increasing natural disasters such as drought and storm, and socio-economic changes caused by globalization and encroachment of market economy in the past three decades, they have maintained basic subsistence relied on livestock herding. These findings suggest a comprehensive risk management based on the integration between local knowledge and practice of pastoralists and scientific technology for a sustainable development of pastoral societies.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成 22 年度	900,000	270,000	1,170,000
平成 23 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：人類学、アフリカ地域研究

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：アフリカ、遊牧社会、生態人類学、自然災害、生存基盤、移動性、持続可能

1. 研究開始当初の背景

アフリカ大陸総面積の74%を占める乾燥・半乾燥地域には、主に家畜に依存する遊牧民が暮らしている。20世紀後半から、伝統的な遊

牧社会は頻度を増す自然災害とともに、グローバル化や市場経済化の浸透への対応に追われてきた。1980-90年代に行われた研究には、環境破壊の深刻化とともに、国民

国家の形成や、定住化、牧草地の私有化によって高い移動性を特徴とする遊牧が維持できなくなったと論じられた。

2. 研究の目的

本研究では、研究代表者が継続的に調査を行っている北ケニアの遊牧民レンディーレ社会に関する調査・分析すると同時に、アフリカの遊牧社会に関する諸研究との比較をおこなう。具体的には、

- (1) 自然災害に対処し遊牧を維持する在来の知識・技術・制度の動態の解明
 - (2) 社会的・経済的環境の急速な変化に対処する生業多角化の実践
- に注目し、グローバル時代における遊牧民の生存戦略と発展の潜在力を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) フィールドワーク

遊牧民レンディーレ社会を対象とした現地調査を継続的に行なう。とくに研究目的に提示した二つの課題に注目して調査を行なう。

(2) 資料のデータベース化と比較研究

先行研究の成果を収集し、キーワードによる資料のデータベース化、そしてレビューを行なう。

通時的な比較として、研究代表者が行なった北ケニアの遊牧民の調査結果と、1970-80年代の先行研究の報告を比較する

共時的な比較として、社会変容とローカルな対応に注目し、レンディーレ社会とアフリカの他の遊牧社会と比較研究を行なう

4. 研究成果

(1) フィールドワークによる成果

本研究課題の実施中、研究代表者が北ケニアの遊牧社会を対象に計3回現地調査を行なった。干ばつの発生状況や遊牧民による対応、遊牧民による新たな経済活動、そして政府や援助団体の活動とその効果について詳細なデータを得た。具体的には、調査地で2008年から発生した干ばつが、2009年の調査中では深刻な状況であった。干ばつによる被害を調査するために、遊牧民の放牧キャンプを訪ね、家畜の移動や水の利用、治安問題や食料援助について集中的に聞き取りを行なった。干ばつは2010年2月まで続き、3-5月の雨期の降雨によって状況が改善された。2回目の調査では干ばつへの対応とともに、幹線道路の開通に伴って新たに作られた家畜マーケットの調査を行なった。2011年は東アフリカ乾燥地域の広域に大干ばつが発生した。3回目の調査はこの大干ばつ時に行なわれた政府や援助団体による救済とその効果について調査した。

(2) 資料収集・分析と比較研究の成果

現地調査のデータとこれまでの先行研究の結果、そして他の地域で調査・報告された遊牧民の早ばつへの対応と比較研究した。その結果、①アフリカ乾燥地域では干ばつの発生頻度や継続期間が30年前と比べるとより不安定になり、遊牧民自身もこのことを経験知として理解していること、しかし従来の遊牧の知識と技術が治安や民族間問題といった社会条件の制約によって十分に活用できていないこと、そしてグローバルな気候変動との関係性やローカルな災害予測の研究が不十分であることが明らかになった。②各国政府によって進められた定住化政策が遊牧民の生活様式を大きく変え、それによって遊牧社会が自然災害に対して脆弱になった共通

点が明らかになった。一方、小規模な開発援助（井戸作りや女性に対するエンパワメントなど）が人々の生活改善に役に立つこと。また遊牧民が様々な新しい経済活動を試しながら、生業の多角化を図ることによって自然災害を乗り越えている共通点も明らかになった。

（3）情報発信の成果

（1）と（2）の研究成果から、自然災害への対応として、国の行政や研究機関、開発援助機関から牧畜民の家族経営まで、様々なレベルにおける情報の共有や協力が重要であること。そして遊牧社会の発展のためには、不確実性に対応した在来の遊牧技術と戦略を生かしたうえで、近代科学技術と融合したリスク・マネジメントが望まれることを、国際ワークショップや出版物を通して提言を行なった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① SUN X. Longitudinal and Comparative Study in Search of the Continuity and Potential in Pastoral Subsistence of East Africa, *MILA: A Journal of the Institute of Anthropology, Gender and African Studies* Vol.10, University of Nairobi, 69~80, 2009（査読あり）

〔学会発表〕（計3件）

- ① SUN X. “Integrating Scientific Technologies with Local Knowledge and Practice for Sustainable Development of Pastoral Societies,” at

International Symposium “Building Environmental Leaders: Dialogue between Disciplines”, October 26, 2010, Ulan Bator

- ② SUN X. “Rethinking Drought Coping Strategies and Risk Management among Nomadic Pastoralists of East Africa,” at *International Workshop “Integrating Local Practice and Scientific Technologies for Sustainable Development among Pastoral Societies in Africa”*, March 15, 2010, Kyoto University

- ③ 孫曉剛 「リスク・マネジメントと不確実性に生きる一東アフリカ乾燥地域の遊牧社会の事例から」国立民族学博物館共同研究会「リスク・不確実性および未来についての人類学的研究」2009, 11, 8, 国立民族学博物館（大阪）

〔図書〕（計3件）

- ① 孫曉剛 『遊牧と定住の人類学-ケニア・レンディーレ社会の持続と変容』, 昭和堂, 204頁, 2012

- ② 孫曉剛 「不確実性に生きる人々のリスク・マネジメント-自然災害とともに生きる東アフリカ遊牧社会」, 第11章, 『人間圏の再構築-熱帯社会の潜在力』, 速水洋子・西真如・木村周平（共編）, 京都大学学術出版会, 313~332頁, 2012

- ③ 河野泰之・孫曉剛・星川圭介, 「水の利用からみた熱帯社会の多様性」, 第6章, 『地球圏・生命圏・人間圏-持続的な生存基盤を求めて』, 杉原薫・川井秀一・河野泰之・田辺

明生 (共編), 京都大学出版会, 185~209 頁,
2010

6. 研究組織

(1) 研究代表者

孫 曉剛 (SUN XIAOGANG)

筑波大学・生命環境系・助教

研究者番号: 20402753